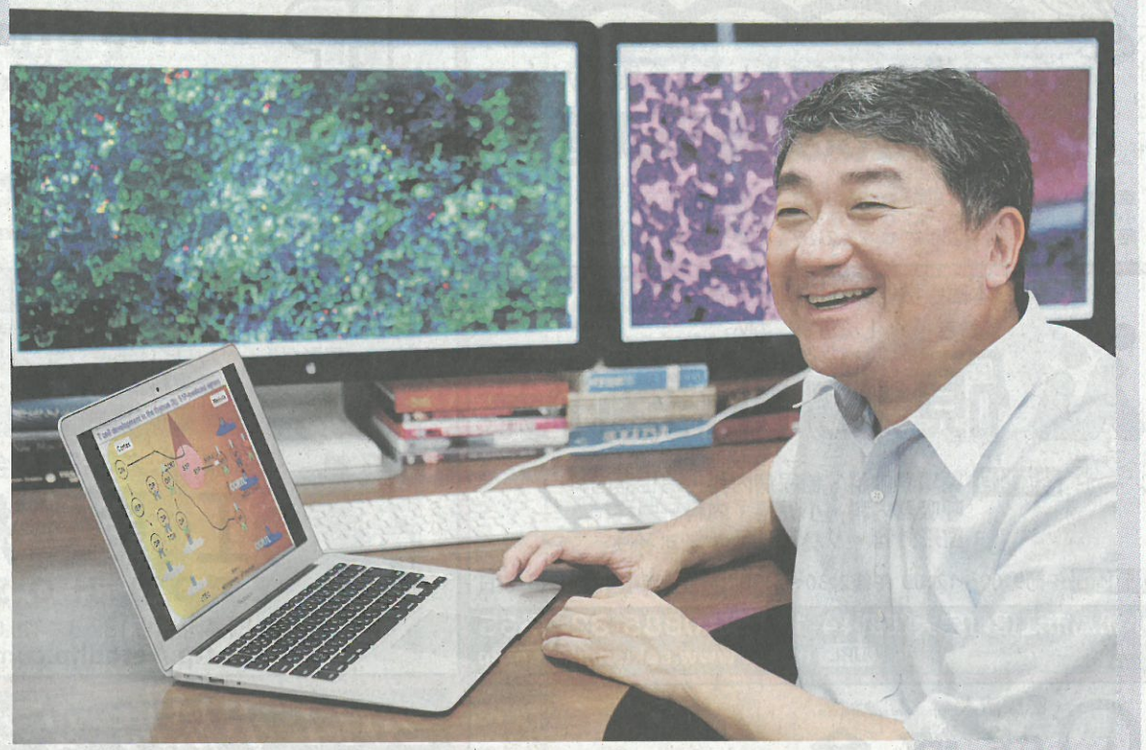
幸せ ここに 70人の群像 ㉙

ゲノム研究の徳島大教授　髙濵 洋介さん（54）

99％の失敗も 難病解明の道



「研究は99％思うようにならない。でも、失敗は気にしない」と笑う髙濵教授＝徳島大疾患プロテオゲノム研究センター（森丘幹也撮影）

中学生のころ、昆虫採集に熱中した。ただし集めたのはカブトムシやチョウではなく、ガ。一般的には人から嫌われている昆虫だ。「ガはよく見るときれな生き物ですよ。3千～4千種あり、チョウの10倍以上。周囲からは『気味が悪い』とよく言われてましたけどね」。40年ほど前の話だが、熱っぽく語る姿は当時のままだ。

◇◆

学校の授業は理科が好きだった。特に生物。法則が物を言う数学や物理と比べ、生物の世界は例外だらけ。動植物の遺伝一つとっても、個体によってさまざまな独自性が存在する。そんな学問に惹かれた。自他共に認める理科少年が進んだ道は研究者。必然だった。

徳島大疾患プロテオゲノム研究センターの教授。遺伝子やタンパク質を研究し、病気のメカニズムの解明に日夜励んでいる。中でも免疫に関わるリンパ球の一種「T細胞」を研究。難病の「1型糖尿病」「重症筋無力症」の根本的な治癒を目指し、新しい治療薬の開発へ道筋を付ける。

研究は疑問の連続だ。真実を追い求めるために仮説を立て、実験に実験を重ねる。そして失敗。99％思うようにはならない。だが、そんな過程が好きだ。「失敗を気にせず、疑問があればとことんのめり込む。自分の性格からすると天職です」と笑った。

髙校卒業後、東京工業大理学部に進学した。生物化学を学んでいたが、実は座学が苦手。教科書を読んだり、教員の発言をノートに書いたり…。正直うんざりしていた。

◇◆

転機となったのは、4年の卒業研究で担当教授に掛けられた言葉だった。「お前が目の前で見ていることは、この世界の最前線だぞ」。眠っていた理科少年の心が再び躍り出した。研究の成果に大小はあるが、一番最初に真相に近付けるのは顕微鏡をのぞいている自分。そう考えると、何事にも能動的に取り組めるようになった。

大阪市生まれ。研究人生を進めた背景には、両親の存在が大きい。実家は鯨肉の加工・販売をなりわいとしていた。1970年ごろに商業捕鯨禁止の影響で家計は苦しくなったが、父は「好きな道に進め」と学費をひねり出してくれた。大学2年で父が亡くなった後も母が必死に仕送りを続けた。大学院へも進んだ。「本当に苦労の掛けっぱなし。今の自分があるのは両親のおかげ」と感謝は尽きない。

好きなことに没頭できる環境は周囲のサポートが重要。両親から学んだことだ。教授として研究チームの支援と後進の指導に労はいとわない。最先端の研究に触れてもらおうと、7年前からは高校生対象の「遺伝子組み換え実験講習会」を開く。

次世代の理科少年・少女の育成にも大きなやりがいを感じている。

（矢田諭史）

＝随時掲載

外国人宿泊者 大幅増

年

は、震災の影響で落ち込んだ11年（1842万人）の2倍余。2

30年までに宿泊客の6人に1人（16・7％）

の60％以上を東京と大阪は

出向や配置転消す方針を固

育児放

24

親の育児放理由で自宅や き去りにされ 満の子どもが 1年度から13 の3年間に24 で395人い 19日、共同通 調査で分かっ 間放置され熱 亡したり、餓 したケースも い子どもが生 にさらされて が浮き彫りに

今年5月に 県厚木市のア

追い出し部屋

出向命

リコー

リコーが、 年に希望退職 かった従業員 出向や配置転 消す方針を固

JA大津・松茂 合併予備 臨時総会で

JA大津（ と JA松茂（ は19日、それ 総会を開き、 印した合併予 を承認した。 2015年4 合併し、JA となることが まった。

JA大津は 正組合員75 ち639人が 開催。JA松 合会館で開き